

会津八一

岩津 資雄 著

会 津 八 一

岩津資雄 著

短歌シリーズ・人と作品 16

岩津資雄（いわつ・もとお）

明治35年，三重県伊勢市に出生。県立津中学校を経て，昭和2年，早稲田大学文学部国文学科を卒業。現在，早稲田大学名誉教授。文学博士。槻の木会々員。著者，『歌合せの歌論史研究』『短歌—古典と近代』『文学論ノート』など，他に歌集『事に触れて』『暗転』『遠白』『舟の穂集』『余情』『七十路』

短歌シリーズ 16
人と作品

会津八一

昭和五十六年七月五日 第一刷発行
昭和六十三年四月二十五日 第三刷発行

定価 二四〇〇円

著者 岩津資雄

発行者 坂倉良一

印刷所 共信社印刷所

発行所 株式会社 桜楓社

東京都千代田区猿樂町一—三—一

電話 二九五—八七七—（営業）

二九五—八七七—（編集）

振替 東京六一—八〇二〇

ISBN4-273-00517-4

検印省略

Printed in Japan

は し が き

本書は「会津八一・人と作品」の初版本に、このたび若干の改訂増補を加えたものである。初版本（昭和三十七年刊）からすでに二十年を経過しているが、この間世の会津研究は長足の進展を見、学者・歌人・書家として三絶の業績を示した道人の全貌が、限なく究明評価された観がある。その研究論文ないし解説・紹介類の文献は枚挙に暇がない程で、単行本のみを数えても二十部を超えている。また各地に建立された道人歌碑は、道人在世中の六基を加えて十八基を数える。これらの数字は端的に、会津研究の進展、それに伴う道人に対する評価の上昇を物語るものであろう。

顧みて小著の「会津八一・人と作品」は、わずかに歌人会津八一の一面を語って視野の狭く、いわゆる木を数えて林を忘れ、森を見て山を見ずの域を出ないものであった。このたびの改訂版には筆者として全面的な改訂増補を期したが、改訂は最小限にとの要請もあって、けっきょく局部的な改訂増補にとどまった。改訂増補の跡を明らかにしておく、と、「秀歌鑑賞編」に三十首を加えて百余首としたのがその一、その二は「八一紀行」に『新渚再遊記』『歌碑の歌について』『秋艸堂の遺構』の三章と『秋艸道人を歌へる』の続編を添えたこと、その三は「年

譜」の改訂と「参考書目」を加えると共に、口絵写真を一新したことである。「作家研究編」その他は、誤植の訂正にとどめざるを得なかった。

ちなみに、右の年譜の作成・参考書目の収集・誤植の訂正の諸作業は、会津研究の新進、高橋文彦君の労を煩わした。また桜楓社の丸山かずみさんには、終始何かと面倒なお手伝いをいただいた。併せてご両人の労に深謝したい。

昭和五十六年六月

岩 津 資 雄

目

次

はしがき

作家研究編

一 道人の生涯……………	九
落合時代まで……………	二
落合時代……………	二六
新潟時代……………	三三
二 作家の背景……………	三七
三 鹿鳴集の歌風……………	三三
四 歌壇との関係……………	三三
五 秋艸道人調……………	六〇
六 道人の歌論……………	六六

秀歌鑑賞編

かすが野に押してゐるつきの	(七九)	うらみわびたちあかしたる	(八三)
つの刈るとしか追ふ人は	(八〇)	かすが野にふれるしらゆき	(八三)
こがくれてあらそふらしき	(八一)	くわんおんの背にそふ芦の	(八四)

ほゝゑみてうつゝごゝろに (八五)
つといればあしたのかべに (八六)
はつなつのかぜとなりぬと (八七)
こんでいのほとけうすれし (八八)
たび人の目にいたきまで (八九)
たび人にひらく御堂の (九〇)
みほとけのうつらまなこに (九一)
ちかづきて仰ぎみれども (九二)
あきはぎは袖にはすらじ (九三)
ゆふさればきしのはにふに (九四)
おほらかにもろ手のゆびを (九五)
楼毘博又まゆねよせたる (九六)
ならさかのいしのほとけ (九七)
浄るりの名をなつかしみ (九八)
しぐれのあめいたくなふりそ (九九)
ふちはらのおほききさきを (一〇〇)
たかむらにさしいるゝ日も (一〇一)
あきしぬのみてらをいでゝ (一〇二)
まがつみはいまのうつゝに (一〇三)
おほてらのまろきはしらの (一〇四)
とこしへにねむりておはせ (一〇五)

あらしふくふるきみやこの (一〇六)
いかるがのさとのをとめは (一〇七)
みとらしのあづさのまゆみ (一〇八)
たちいでゝとどろとどざす (一〇九)
あめつちにわれひとりゐて (一一〇)
みほとけのあごとひぢとに (一一一)
くわんおんのしろきひたひに (一一二)
さきだちて僧がさゝぐる (一一三)
なまめきてひざにたてたる (一一四)
おにひとつ行者のひざを (一一五)
くろ駒のあさのあがきに (一一六)
耳しふとぬかづくひともし (一一七)
やまとちの瑠璃のみそらに (一一八)
みほとけの肱まろなる (一一九)
かぎりなきみそらのはてを (一二〇)
たちばなのこぬれたわゝに (一二一)
むかつをの杉のほこふで (一二二)
おくりいでてかたるほふしの (一二三)
野のとりのはのをさゝに (一二四)

むさしのゝくさにとばしる (二二四)
うつくしきはのほにふみは (二二五)
みよしののむだのかはべの (二二六)
はるさむぎやまのはしめの (二二七)
みよしののやままつがえの (二二八)
あせたるをひとはよしとふ (二二九)
ゆめどのはしづかなるかな (二三〇)
義疏のふでたま／＼おきて (二三一)
くさふめばくさにかくるる (二三二)
かすがのゝよをさむみかも (二三三)
かすみたつはまのまさごを (二三四)
せきばくとひはせうだいの (二三五)
かべにゐてゆかゆくひとに (二三六)
いかでわれこれらのめんに (二三七)
をとめらはかかるさびしき (二三八)
をとめらがものがたりゆく (二三九)
ふるてらのみだうのやみに (二四〇)
のぼりきてしづかにむかふ (二四一)
あのかたらみほとけたちの (二四二)
やまでらのほふしがむすめ (二四三)
さはやまのこのしたがくり (二四四)

たち入ればくらきみだうに (二四二)
ばんじょうのそももてむねに (二四三)

このごろはものいひさして (二四四)
いりひさすきびのうらはを (二四五)
かまづかのしたてるまどに (二四六)
てらにはのひるはしづけし (二四七)
ふるみやのかべにたてば (二四八)
かれくさにわかくさまじり (二四九)
おほぞらのほしにつづりて (二五〇)
つらねうつはうはもかなし (二五一)
ことあげせうでたつころ (二五二)

うつしみはいづくのはてに (二五三)
むかしびとこゑもほがらに (二五四)
まかりきてわせたのために (二五五)
ふりさけておもへばとほき (二五六)
いにしへをわがすごとく (二五七)
くさのとにこもごものきの (二五八)
こがくれてすめばうれしも (二五九)
こがくれてわれおいけらし (二六〇)

みやこべをのがれきたれば (一五)
いとのきてけさをくるしと (一五)
やまばとのとよもすやどの (一五)
くみいでてひとにすめし (一五)
ひとみなのはばかりわれに (一五)
くわんおんのだうのいたまに

(一五)

ひそみきてたがうつかねぞ (一五)
ふるさとのほたのはなかに (一五)
あなごもるけものごとく (一五)
たうゑすとひとこそるひを (一五)
たけゑがくふでのしたより (一五)
ゑがきこしすみゑのたけの (一五)

としゆくとののしるいちの (一五)
みゆきふるみちのちまたを (一五)
ありわびてわがよむうたを (一五)
みちのへのをぐさのつゆに (一五)
くにみすためぐりいまして (一五)
いねかるとたなかにたてる (一五)
あしびきのやまのほふしが (一五)
ほほゑみてきこしめしぬと (一五)
ふなびとははやこぎいでよ (一五)
うたよみのなにおふわれに (一五)
つかさびとこゑもほがらに (一五)
わたつみのそこゆくうをの (一五)

作品選

一五

八一紀行

一五

著作・参考文献

一五

会津八一略年譜……………	三〇
短歌索引……………	三六

装画 佐藤多持

作家研究編

一 道人の生涯

「会津八」を知らないか——

これは秋艸道人＝会津八一が、その臨終の病床で最後に口にした言葉であったという。また同じとき、「おれは天下の会津だ」という言葉も洩らしたと伝えられている。臨終の言葉として、いずれも異様な響きをもったものである。これらの言葉は道人が、その枕頭に待っていた誰かに向かって、怒りとともに発したもののか、それとも刻々に迫まりつつあった死魔におびえて、夢うつつの間に発したうわことであったのか、それは知るよしもない。しかしこれらの言葉はまた、道人の日ごろの口癖——といわないまでも、ひどく興奮した場合に、ときどき口にした、自信と誇りにみちた言葉でもあったのである。そのことを知っているほどの人ならば、これを臨終の言葉と聞いても、かくべつ異様に感じないであろう。むしろこれが象徴的な臨終の言葉と思うかも知れない。ところで、もし私が言葉どおりの意味で、「会津八一を知らないか」と開きなおられたとしたら、私は「よく知っている」と答えられるであろうか。そして、道人が「天下の会津」であったゆえんを、充分に語ることができるであろうか。とてもその自

信はないが、とにかく私は私なりに見た会津八一を語るほかはない。

秋艸道人は学者であると同時に、詩人であり芸術家であった。学者としては東洋美術史学を専攻して偉大な業績を残したが、その学問教養はまた英文学・ギリシャ美術・文字学などにもわたっており、詩人芸術家としては短歌と書道において独自の一家の風をたてるとともに、俳句や水墨画もよくするという、まことに多学多芸で、多角的な活躍をした。道人自身としては、あくまで学者をもって任じ、作歌や書道は余技とみなしていたのであるが、しかもそれらの余技に傾けた道人の熱意と自信のほどは強く、表芸とした美術史学のそれにも劣らぬものがあった。道人こそは、いわゆる三絶を一身に具現した稀有の存在というに値する。世の名声からいえば道人はむしろ、その余技とした作歌によってもっとも広く世に知られた観があった。その点は道人自身もみとめていたらしく、歌集の後記に、

あゝ、我年少にして学に志し、都門に出て書を読み、この垂老に及びて遂に為すところなく、かへって平素諷詠するところの短歌によって、少しく人の識るところとなれるのみ。

(山光集)

と述懐していたところである。道人は多学多芸の人であったが、その学問と芸術とは常に相互

に連関しつつ、その豊かな趣味につながり、またその個性の強い人がらに結びついて、渾然とした一家の風格を形成していた。逆にいえば、道人の風格は、その趣味と個性を経緯としてあらゆる学芸に浸透し、濃厚な会津色とか秋艸道人調といったものを織りなしていたのである。従って会津八一を語ろうとするものは、その学芸・趣味・個性をとおして独自の風格を語らなければならぬ。一美術史学者としての業績をかぞえた程度では、とてもこの特異な人物の全貌を語るとはいえない。ここに一歌人会津八一を語ろうとするに当たっても、そのような風格、そしてそれを形成している学芸・趣味・性格の一般を、ひととおり考慮に入れておかなければならぬであろう。

落合時代まで

秋艸道人Ⅱ会津八一は、明治十四年八月一日、新潟市古町通り五番地に生まれた。八一は、生誕の月日にちなんだ名であろう。青年時代の雅号にも、八朔、八朔郎というのがある。秋艸道人は中年以後（東京高田町時代以後）に用いた雅号。ほかに渾斎の号もある。父は会津政次郎、母はイクといった。父系は名門の市島謙吉（春城）の一族につながっていた。道人は十八歳のとき、病没した会津サイの養子となって、会津家を相続したのであるが、その出生や両親につ

いて多少はつきりしないふしがある。「鹿鳴集後記」によると、「父母は久しく、叔父が継ぎたる本家に同居し、我等兄弟は其所にて生れ、また人となれり」とある。また道人の年譜には、その生家会津屋は明治四十一年、新潟市の大火のため焼失したとある。その叔父は会津友二郎であるが、この人は桂園風の歌を詠んだ人で、道人は少年時代、この叔父から文学的感化を受けたという。後年道人は、この叔父の死に際して挽歌を詠んでおり、また年若くして死んだ父を偲ぶ歌も詠んでいる。しかし、その母については一首も詠んでいない。

明治二十八年、道人は新潟市西堀小学校を経て新潟中学校に入学した。中学生の道人は字がまずく、習字の成績はかんばしくなかった、という。これは後年の名筆家として、おもしろいことである。道人は郷土の大先覚良寛禅師の歌に親しむとともに、万葉集の歌にも興味をもったが、中学五年生の頃には、『略解』『古義』などの注釈書によって万葉集の歌を読んだ、という。これは当時の中学生として、おどろくべき早熟ぶりであったといわなければならない。道人は一方、俳句にも興味をおぼえた。折から中央文壇では明治三十年、正岡子規らによって俳誌「ホトトギス」が創刊され、三十二年には同じく子規を中心とする根岸短歌会が成立していた。道人の文学熱は中央文壇の刺激によるものらしく、道人は「ホトトギス」および、「ホトトギス」と同じく子規が選句を担当していた新聞「日本」を愛読しつつ、句作に熱中した。句作のかたわら作歌も始めた。俳句は子規の主張とその流風に傾倒したが、短歌のほうは俳句で